

現代語訳 法然上人行状絵図 目次

※目次の各巻数および各段数の見出しは、便宜上付記したもので、本文では記載していない。

発刊によせて 7

刊行の辞 10

監修のことば 12

『法然上人行状絵図』について 30

凡例 43

第一巻 誕生……45

第一段 行状絵図制作の意図と秦氏の懷妊 45／第二段 誕生と奇瑞 47

第三段 命名 48／第四段 父時国の家系と定明の夜襲 48／第五段 父時国の死と遺言 49

第二巻 出家……51

第一段 定明の逐電と念仏往生 51／第二段 勢至丸、菩提寺の観覺の室へ 51

第三段 観覺、勢至丸の器量を見て比叡山へ。母との別れ 52

第四段 勢至丸、都へ。法性寺摂政と会う 53

第三巻 修学……55

第一段 勢至丸、比叡山の持宝房に入る 55

第四卷

諸學者歴訪……59

- 第二段 勢至丸、源光に四教義を試され不審を示す 55
第三段 源光、勢至丸の器量に驚き皇円の室に送る 56
第四段 勢至丸、十五歳にして剃髪・受戒 56
第五段 勢至丸、皇円に言われ天台六十巻を読み始める 57
第六段 勢至丸、十八歳にして叡空の室に入り、法然房源空の名を与えられる 57

第五卷

智慧第一……66

- 第一段 法然、弟子たちに学問の学び方を説く 66
第二段 法然、弘法大師の十住心論について語り、大師との夢を回想 67
第三段 中川の実範、法然の弟子となる 71
第四段 法然、智慧第一の誉れ。禪と戒について説く 72
第五段 法然、立宗の文を示す。証真、法然の智慧を褒める 73
第六段 法然、静厳に天台の奥義を授ける。木曾義仲乱入の日聖教を見ず 76

第六卷

立教開宗……77

第一段 法然、一向念仏に帰す 77／第二段 法然、叡空と称名念仏と観想念仏で論争 78

第三段 法然、吉水に庵を移す 79／第四段 法然、善導の観経疏を深く心に留める 80

第五段 法然、念仏以外の余事をまじえず 82

第六段 法然、善導の釈義で浄土宗を立てる 82

第七段 法然、聖道・浄土の二門を説く 83

第八段 法然、重源に宋より浄土五祖像の持ち帰りを依頼 85

第七卷

靈感瑞現……87

第一段 法然の法華三昧に普賢菩薩出現 87／第二段 法然の華嚴経披講に蛇が現れる 87

第三段 上西門院への円頓戒講義を蛇が聴聞 88／第四段 法然の三密修行に瑞相出現 89

第五段 法然、夢中で善導に会う。二祖対面 89／第六段 法然、口称三昧を発す 91

第八卷

靈感瑞現……93

第一段 法然、三昧発得後、暗夜に眼より光を放って聖經を読む 93

第二段 法然、念仏中に勢至菩薩来現 94／第三段 法然、空中に阿弥陀三尊を拝す 95

第四段 信空、行道中に勢至菩薩を見る 95

第五段 法然、月輪殿を退出の時、頭光現わさる。頭光踏蓮 95

第六段 法然の念珠、光を発す 96

第七段 法然、自分の肖像を水鏡で直し、勢至円通の文を書く 96
第八段 諸人さまざまな瑞夢を見る 98

第九卷

仙洞如法経…… 99

第一段 法然、仙洞御所で如法経の先達を勤める 99／第二段 料紙を運ぶ 100
第三段 写経の水を迎え、写経する 101／第四段 写経を終わりに十種供養を行う 102
第五段 写経を奉納 103／第六段 後白河法皇、法然を歓喜懺法の先達にする 104

第十卷

三帝受戒…… 105

第一段 法然、高倉天皇に円頓戒を授ける 105
第二段 法然、後白河法皇に円頓戒を授け往生要集を講ず。法皇、藤原隆信に上人の肖像を
画かせる 105

第三段 法然、後白河法皇の臨終に善知識を勤める 106

第四段 法皇の菩提のため住蓮・安楽ら六時礼讃を修す 107

第五段 法然、後白河法皇の十三回忌に六時礼讃と浄土三部経如法経を勤める 107

第六段 後鳥羽院ら法然から受戒 112

第十一卷

選択集撰述…… 113

第一段 九条兼実、上人に深く帰依、父の忌日の仏事に上人を僧の一の座に 113

第二段 兼実、月輪殿造宮に際し、上人の休息所を造る 114

第三段 兼実、上人をはだしで迎える 114／第四段 法然選択集を撰述 115

第五段 法然、房籠りするが、兼実病氣と言つて上人を請す 116

第六段 兼実、上人について出家受戒 117

第十二卷 月卿雲客帰依…… 118

第一段 藤原経宗の帰依と往生 118／第二段 藤原兼雅の帰依と往生 120 119

第三段 藤原隆信の帰依と往生 119／第四段 藤原範光の帰依と往生 120 119

第五段 藤原実宗の出家と往生 121／第六段 徳大寺公継の往生 121

第十三卷 聖護院往生・師範帰仰…… 123

第一段 聖護院静恵、上人に帰依・往生 123

第二段 法然、静厳に生死を離れる道を説く 124

第三段 法然、清水寺で説戒。印藏、阿弥陀堂常行念仏を始める 125

第四段 興福寺の古年童、上人の説戒で出家 126

第五段 法然の師叡空はじめ、多くの師範が上人の弟子に 127

第六段 法然、藤原宗貞夫妻の寺院建立本尊供養を断る 129

第十四卷 大原問答……131

- 第一段 天台座主顕真の来歴と、半行半座の行法を出離の直路と思う 131
- 第二段 顕真、坂本で法然と解脱の道について問答。後に大原勝林院で問答 132
- 第三談 顕真、専修の行者となり、おばの尼僧に念仏勧進の手紙を送る 135
- 第四段 顕真、五坊を建立して称名を相続 137
- 第五段 顕真、天台座主になり廃れた仏事を再興するも称名怠らず往生 138

第十五卷 慈鎮・良快帰仰……140

- 第一段 慈鎮、法然から円頓戒を受ける 140／第二段 慈鎮、西方懺法を行う 141
- 第三段 慈鎮、四天王寺の絵堂を再建、九品往生人の図を描かす 142
- 第四段 九条兼実の息子良快、浅近念仏抄を記す 153

第十六卷 明遍僧都……157

- 第一段 明遍は当時無双の碩学、高野山に通世 157
- 第二段 明遍 選択集に偏見を抱き、夢で上人にいさめられる 158
- 第三段 明遍、天王寺で上人に念仏往生のことを聞く 160
- 第四段 明遍、早練りの数遍を認めず、夢中で善導から正される 161
- 第五段 明遍、上人の勧化を仰信、念仏相続して往生 162

第十七卷 聖覚法印……164

第一段 聖覚、智弁すぐれ、上人の化導に帰し、唯信抄を作る 164

第二段 聖覚、上人の病を治す 166

第三段 聖覚、雅成親王の質問に、念仏が最上と答える 167

第四段 聖覚、上人の三回忌に融通念仏を行う 169／第五段 聖覚、念仏のうちに往生 169

第六段 上野国の明円、夢中で聖覚から念仏の教えを受ける 170

第十八卷 宗義顕彰……173

第一段 法然、選択集を説く 173／第二段 法然、往生大要抄を説く 181

第三段 法然、女人往生を説く 183

第十九卷 諸人帰依……187

第一段 法然、兼実の妻に念仏を勧める 187／第二段 法然と阿波介の念仏の勝劣 189

第三段 住山僧、東大寺の上棟を見て信心を固める 190

第四段 聖如房の臨終に手紙を送る 191

第五段 法華経千部読誦発願の仁和寺の尼に念仏を説く 195

第二十卷 諸人帰依……197

第一段 強盗天野四郎に決定往生の一言を与える 197

第二段 沙弥随蓮、三心への疑心を、夢中で上人から教えを受ける 203
第三段 作仏房、熊野権現のお告げで上人に帰依 205

第二十一卷

ご法語…… 208

第一段 上人、常に仰せられる御詞 208／第二段 一紙小消息 216
第三段 法然、念仏行者の心得べき様を説く 218

第二十二卷

ご法語…… 224

第一段 法然、安心起行を説く消息を送る 224
第二段 百四十五カ条の質問に答える 234

第二十三卷

ご法語…… 240

第一段 法然、往生用心の質問に答える 240
第二段 法然、鎮西の修行者に、観想念仏の非を説く 253

第二十四卷

ご法語…… 255

第一段 法然、阿弥陀經の大意を説く 255
第二段 法然、諸宗の祖師極樂往生の様を説く 257
第三段 法然、安樂房に往生を説く 258／第四段 法然、尼女房らに往生の要点を説く 259

第五段 法然、信実のおばに往生の要点を説く 261／第六段 尼妙真、念仏で往生 262

第二十五卷

ご消息…… 264

第一段 鎌倉の二品禅尼の念仏往生の問いへの返信 264

第二段 大胡の太郎実秀の念仏安心の問いへの返信 267

第三段 弥次郎入道、夢の告げにより死期を知る 274

第二十六卷

御家人帰仰…… 277

第一段 甘糟太郎忠綱、戦場で往生 277

第二段 宇都宮弥三郎頼綱、上人から念仏往生の教えを受ける 279

第三段 園田太郎成家、上人に帰依、出家。法名智明 281

第四段 西明寺殿北条時頼、智明の教示で念仏往生 284

第二十七卷

熊谷蓮生…… 287

第一段 熊谷次郎直実、法然に会い出家、法名蓮生 287

第二段 蓮生、上品上生を望む 289／第三段 法然、蓮生の問いに但念仏を教える 294

第四段 兼実、蓮生の往生を尋ねる 296／第五段 蓮生の往生 299

第二十八卷 津戸三郎……302

第一段 津戸三郎、法然に帰依 302

第二段 津戸三郎、鎌倉の念仏詮議に法然より教えを受ける 307

第三段 津戸三郎、自害往生 312

第二十九卷 一念義停止……317

第一段 幸西、一念義を立てる 317 / 第二段 基親、一念義の邪正を法然に問う 318

第三段 基親への法然の返信 321 / 第四段 光明房の一念義への訴えに、法然返信 322

第五段 法然、一念義禁止の起請文を定める 324

第三十卷 東大寺造営と和歌……328

第一段 皇円、発願して大蛇に 328 / 第二段 浄心房、偽りの行者のこと 330

第三段 平重衡、法然から戒を受ける 331

第四段 法然、重源を東大寺造営の大勧進に推す 332

第五段 法然、東大寺で浄土三部経を講ず 333 / 第六段 法然の和歌 335

第三十一卷 七箇条起請文……342

第一段 南都北嶺の衆徒、専修念仏の停止を企てる 342

第二段 法然、七箇条起請文を天台座主に提出 342

第三段 兼実、仲裁のため、座主に手紙を送る 346

第四段 興福寺の衆徒、朝廷に陳情書を出す 350

第三十二卷

登山状…… 351

第一段 法然、聖覚に筆を執らせて、所懐を述べる 351

第三十三卷

上人流罪…… 373

第一段 住蓮・安樂、六時礼讃を勤め、御所の女房出家。安樂死罪 373

第二段 法然に遠流の宣下 374 / 第三段 法然、流罪を朝恩と 376

第四段 兼実、機を見て勅免を請わんと 378

第三十四卷

配所下向…… 380

第一段 角張の成阿弥陀仏、配所に随行。兼実、配所を知行の讃岐に変える 380

第二段 法然、鳥羽より川船に乗る 381 / 第三段 法然、経の島に着き、村人結縁 382

第四段 高砂の浦で漁師夫婦を教化 382 / 第五段 室の泊で遊女を教化 383

第三十五卷

配所化導…… 385

第一段 法然、塩飽に着き、地頭の西忍を教化 385

第二段 法然、小松庄生福寺に住み諸人教化、勢至菩薩像を造る 386

第三段	兼実、臨終に臨み、光親に法然赦免の遺言を残す	386
第四段	津戸三郎の手紙に返事を送る	389／第五段 直聖房、熊野権現の夢告を受ける
第六段	法然、善通寺を参拝	390

第三十六卷

勅免帰洛……391

第一段	光親、上皇に度々上人の赦免を申し入れ、勅免の宣旨	391
第二段	法然、摂津国押部で諸人教化	392
第三段	法然、勝尾寺に住み、僧衆の装束を施入	393
第四段	法然、勝尾寺に一切経を施入、開題供養に聖覚を招請	393
第五段	上皇、巫女の託宣により法然帰洛の宣旨	396
第六段	法然、慈鎮の沙汰で大谷に居住	398

第三十七卷

上人往生……399

第一段	法然、病床に臥し、弟子の問いに「予が遺跡は諸州に遍満」と答える	399
第二段	法然、阿弥陀三尊の来現を見る	400
第三段	法然、十余年来にわたり極楽莊嚴や仏・菩薩を拝んでいたことを話す	400
第四段	法然の坊の上に瑞相が現れる	401／第五段 法然、眠るが如く往生
第六段	桑原左衛門入道、上人の真影を写し留める	403

第三十八卷 諸人靈夢・廟堂…… 405

第一段 諸人、法然の往生を、夢を見て知る 405

第二段 ある人、自身の墓所を法然に寄進 407

第三段 法然の廟堂の柱を寄進した太郎入道往生 409

第三十九卷 七七日追善…… 410

第一段 初七日の仏事、導師信蓮房 410 / 第二段 二七日の仏事、導師求仏房 411

第三段 三七日の仏事、導師住真房 411 / 第四段 四七日の仏事、導師法蓮房 412

第五段 五七日の仏事、導師隆寛 412 / 第六段 六七日の仏事、導師聖覚 412

第七段 七七日の仏事、導師公胤 413

第四十卷 諸学匠念仏誹謗…… 415

第一段 公胤、法然を誹謗するも後に懺悔、選択集を非難した浄土決疑鈔を焼く 415

第二段 明恵、摧邪輪を著すも後に後悔 419

第三段 静遍、選択集を非難しようとするが、逆に念仏者に 420

第四十一卷 毘沙門堂明禪帰依…… 423

第一段 明禪、選択集を読んで専修念仏に帰依、述懐抄を記す 423

第二段 明禪、雅成親王や後鳥羽院の往生に対する問いに答える 426

第三段 明禪、湛空を善知識に往生 432

第四十二卷

滅後法難…… 434

第一段 山門、法然の廟堂破却を策す 434／第二段 平時氏、武威で廟堂破却の使者退散 435

第三段 法蓮房ら、法然の遺骸改裝を議す 436／第四段 法然の遺骸を西郊に移す 437

第五段 法然の遺骸を一時嵯峨へ、そして広隆寺の円空の許へ 437

第六段 法然の遺骸を西山粟生野で荼毘 438／第七段 法然の遺骨を二尊院に納める 438

第四十三卷

上人の門弟 一…… 440

第一段 法蓮房信空 440／第二段 西仙房心寂 442／第三段 正信房湛空 445

第四段 信寂房 446／第五段 乘願房宗源 449

第四十四卷

上人の門弟 二…… 452

第一段 隆寛律師 452／第二段 法然、選択集を隆寛に与える 454

第三段 隆寛の配流定まる 455／第四段 隆寛、配所の相模国飯山で往生 455

第五段 朝直朝臣、隆寛に教えを受け出家 457／第六段 遊蓮房円照 460

第四十五卷

上人の門弟 三…… 462

第一段 勢観房源智 462／第二段 禪勝房 465／第三段 俊乗房重源 475

第四十六卷

上人の門弟 四……478

- 第一段 聖光房弁長 478／第二段 弁長、法然に二箇条の疑問を尋ねる 480
第三段 弁長、末代念仏授手印を著す 481／第四段 弁長、筑後に善導寺を建立し往生
第五段 弁長、念仏往生修行門を著す。源智、弁長に手紙を送る 485 483

第四十七卷

上人の門弟 五……489

- 第一段 善恵房証空 489／第二段 証空、白木の念仏を説く 490
第三段 津戸三郎、法然往生後は、証空に不審を訊く 494
第四段 証空は十一面観音の化身 502

第四十八卷

上人の門弟 六……505

- 第一段 空阿弥陀仏 505／第二段 空阿へ、安心決定についての法然の返書 506
第三段 法然、空阿を念仏の大先達と 508／第四段 空阿奇瑞往生 508
第五段 往生院の念仏房 509／第六段 真観房感西 510／第七段 石垣の金光房 511
第八段 一念義の行空・幸西、諸行本願義の長西の三人は門弟の列に入れず 511

あとがき 513

語句解説 卷末

第一卷

●第一段

さて、思いをめぐらしてみると、仏教の根本の師である釈迦如来は、迷いの世界をあてもなくさまよう人びとをもれなく救うために、誰もが等しく私のひとり子であるという悲願を、深くおこしになられた。そのため、釈迦如来の国土である無勝莊嚴淨土^{むしょうじょうぎんじょうど}での教化^{きょうけ}をただちにやめて、おそれ多くも五濁^{ごじよく}や十惡^{じゅく}に満ちたこの世にお入りになって以来、本来は生まれることがないのに、人間として誕生する姿を示され、そのとき無憂華樹^{むいうけじゆ}の華はほほえむかのように咲きほこった。そしてまた、本来は入滅することがないのに入滅する姿を示され、そのとき娑羅双樹林^{さらかうじゆりん}に吹く風は集まる者たちの心を悲しませた。

釈迦如来が生きておられた八十年の間、空に広がる雲のような慈悲の教えは、すべての生きものを等しく覆い、お亡くなりになって二千年以上もの間、水のように煩惱^{ぼんのう}を洗い清める仏の教えは、今日までインド・中国・日本の三国に流れている。仏の教えはいろいろあつて、その利益^{りやく}もまちまちであ

る。

そのなかで、聖道しょうどう*の一門は、汚れたこの世界で自力じりき*を励まし、五濁に満ちたこの世で悟りを目指すのである。ただ心配なことに、時代が末世まっし*となったため、自我もあらゆる存在も実体はないという真理の月が、雲に隔てられて見えにくくなり、心は煩惱を起こす対象にとらわれて、地獄・餓鬼・畜生の三惡道さんあくどう*に沈ませる煩惱が、炎のように燃えさかるのを留め難いことである。煩惱を持つ凡夫ぼんぷ*が、この次に生まれ変わる時に、迷いの世界をめぐる輪廻りんね*から脱出できる教えは、ただ浄土じょうど*の一門のみである。

これについて、学僧たちの解釈は、蘭と菊が美を競い合うかのようにすぐれているが、なかでも中国唐時代の善導ぜんどう*和尙わしやうは、阿弥陀仏あみだぶつ*が姿を変えてこの世に現れて、ただひとり本願ほんがん*の深い意図を明らかにし、わが国の法然上人ほうねんしやうにんは、勢至菩薩せいしぼさつ*が姿を変えて現れた方で、ひたすら称名しょうみょう*という大切な行をお広めになった。日本、中国と国は異なるが、人びとへの教化は一致しており、男も女も、貴い人もそうでない人も信心を得やすく、紫雲やよい香りなど、往生おうじやう*の奇瑞が頻繁に現れた。念仏の広まりは、この日本で最も盛んとなった。

ところが、法然上人がお亡くなりになってから、歳月は次第に過ぎ去っている。上人の教えさとされた言葉や利益の跡は、人びとの記憶から徐々に忘れられつつある。もし、記録して後の時代に残さなければ、誰が賢人を見て自分も同じようになりたいと思ひ、迷いの世界を離れる大切な方法のある

ことを知るだろうか。

このようなわけで、広く以前からの言い伝えをさがし集め、すべてにわたり古い記録を検討し、真実を選んで誤りを正し、おおよそご生涯の行状を記すことにした。愚かな人にも理解しやすく、読む人の信心を増進させるために、数軸の絵図に表現し、後代の人びとの手本として備えることにする。往生を願う人びとで、誰がこの志しをほめないであろうか。

そもそも法然上人は、美作国みまさかのくに（今の岡山県北部）久米南条郡くめなんじょうのこおり稲岡莊いなおかのしょうの人である。父は久米郡おつりしゅうしきうととくくにの押領使漆時国、母は秦氏はたうじである。子どものないことを嘆いて、夫婦が心を一つにして仏神に祈り申し上げたところ、秦氏はかみそりを呑む夢を見てたちまち懷妊した。時国は、「お前が孕んだ子は、きつと男の子で、朝廷の人びとの戒師かいしとなるに違いない」と言った。秦氏の心は穏やかで落ち着き、身重みおもの苦痛がなかった。厳しく酒・肉・五辛ごしんを断ち、仏教に帰依きえする心が深かったという。

●第二段

崇徳院すくじやういんご在位中の長承二年（一一三三）四月七日の正午、ついに秦氏は苦しむことなく男子を出産した。ちょうどその時、紫雲が空にたなびいた。館の内の家屋の西側に、根元が二股に分かれ、枝葉のよく繁った高い椋むくの木があり、白幡しらばたが二流れ飛んできて、その梢にかかった。白幡についた鈴鐸れいたく

の音が空に響きわたり、綾織あやおりの模様が陽に照らされて輝いた。それから七日が経って、白幡は天に上り去った。これを見聞きした人びとで、不思議と思わない者は誰もいなかった。このことがあつてから、その木を〈両幡ふたはたの棕の木〉と名づけた。歳月が過ぎて、棕の木は傾いて倒れてしまったが、すばらしい香りが常に漂い、不思議な出来事が絶えなかった。人びとはこれを崇めて、そこに仏閣を建てて誕生寺と名づけ、法然上人を祀った御影堂みえいどうを造り、念仏を称えさせた。

その昔、応神天皇ご誕生の時に、八つの幡が舞い降りた。これは天皇が正しい見解や正しい言葉使いなどの八正道はつしょうどうを実践なさる前ぶれだと言われている。このたびの上人誕生の時のめでたい出来事は、応神天皇の時と同じである。きつと深い意味があるにちがいない。

●第三段

生まれた子どもは、呼び名を勢至ぜいしと言った。竹馬に鞭むちを当てて遊ぶ年頃から、生まれつきの聡明さがあり、まるで大人のようにであった。そしてまた、どうかすると、西の壁に向かって座る癖があつた。天台大師智顗ちぎの子どもの頃の振る舞いと異なることがなかったそうだ。

●第四段

漆時国の先祖をたどると、仁明天皇にんみんの御子である西三条右大臣*みなもとのひかる源光公の子孫であつて、式部

省^{*}に仕える源家の長男の年^{とし}が、御所の陽明門^{くわうめいもん}で藏人^{くらうじん}の兼高^{かねたか}を殺した。年はその罪によつて美作^{はいさく}に配流された。そこで、この国の久米郡^{くみぐん}の押領使^{おしりやうし}である神戸^{かんのべ}の大夫^{たいふ}、漆元国^{もとのくに}の娘と縁組みをして男子を生ませた。元国には男の子がなかったので、その外孫^{ぐわいそん}を子どもとしてその跡を継^{つぎ}がせたが、そのとき源の姓を改めて漆盛行^{しきりやうき}と称した。その盛行の子が重俊^{しげとし}、重俊の子が国弘^{くにひろ}、国弘の子が時国である。

このようなわけで、時国は少しばかり家柄を自慢する気持ちがあつて、稲岡莊^{いぬがき}の預所^{あずかりどころ}、明石^{あかし}の源内武者^{みなむしや}定明^{さだあきら}〔伯耆守^{はくしよしゆ}源長明^{ながあきら}の嫡男^{ちやくなん}で、堀川院^{ほりがわい}に在位中の滝口^{たきぐち}の武士であつた〕を見下して執務に従わず、面会の礼も尽くさなかつたので、定明は深く恨みをいだき保延七年^{ほうえん}（一一四二）の春、時国に夜討ちをかけた。

この時、時国の子勢至は九歳であつた。逃げ隠れて隙間からあたりをうかがうと、定明が庭にいて、矢をつがえて立っていたので、勢至は小さな矢で射た。矢は定明の眉間に突き刺さつた。定明は、この傷跡が残つて夜討ちのことが露見してしまうに違ひないと思つたので、時国の親族が復讐するのを恐れて、行方をくらまし、ずつと稲岡莊には戻らなかつた。それ以来、この子を〔小矢児^{こやち}〕と名づけた。この事件を見聞きした人びとは、誰ひとり感銘しないことはなかつた。

●第五段

時国は深い傷を受け、今まさに死のうとする時、九歳のわが子に向かつて、「おまえは、会稽^{かいけい}の恥^{*}。